

# 寝屋川市就学前教育・保育プログラム

(ねやっ Co-エージェンシー・プログラム)

令和5(2023)年 3 月

寝屋川市子育て・教育総合支援本部

# 目 次

1 はじめに.....	1
2 本市における状況.....	3
3 寝屋川市の就学前教育・保育の基本的な考え方.....	5
4 めざす子どもの姿.....	7
5 就学前教育・保育プログラムと小学校教育との確かな接続イメージ図.....	8
6 発達の特徴.....	9
7 大切にしたい子どもの姿～一人一人に寄り添って～.....	10
8 ねやっ Co-エージェンシー・プログラム.....	11
9 小学校との接続.....	19

# 1 はじめに

「『人生の始まりこそ力強く』～学習においても『ウェルビーイング』の点でも、人生の初期に力強いスタートを切ることができた子どもたちは成長してからも良い成果に恵まれることを示す一連のエビデンスが蓄積されてきている。」、これは、OECD（経済協力開発機構）の「Starting Strong III」（日本語訳）の序文の言葉です。

近年の急速な技術革新や様々な分野でのグローバル化等の進展により、社会の在り方が劇的に変わる時代が到来しています。加えて、新たな感染症の世界的流行、気候変動や頻発する大規模災害、世界各地で止まない武力紛争など、今の時代を生きる我々が経験したことのない課題に直面し、様々な局面で将来の予測が困難な時代となっています。

世界的に「VUCA 時代」（Volatility: 変動性、Uncertainty: 不確実性、Complexity: 複雑性、Ambiguity: 曖昧性）といわれる変動性の高い時代を迎えていると言われ、これからの時代を生き抜き、持続可能な地球環境の維持や個人の幸福はもとより社会全体の幸福の実現を目指す人間を育てることが、教育における大きな課題となっています。

OECD では、2030 年という近未来において子どもたちに求められる資質・能力を検討し、その育成につながるカリキュラムや指導方法などを検討するため、「OECD Education 2030」プロジェクトが、参加国政府や専門家、学校ネットワークなどをはじめとする幅広い関係者により、共同で進められています。

OECD で共有されているビジョンは、「我々大人は、すべての子どもたちが、一人の人間として全人的に成長し、その潜在能力を引き出し、個人と社会の『ウェルビーイング』、地球の持続可能性の上に築かれる、未来の形成に携わっていくことができるように支えていく責務があるという認識のうえ、複雑な社会的課題が拡大していく時代において、教育カリキュラムも、まったく新しい方向に進化し続けなければならない」というものです。

幅広い教育目標として掲げられているのは、物質的な豊かさだけでなく健康的な生活や社会的な関係、安全などの生活の質全体をとらえた概念である個人の「ウェルビーイング」とともに、持続可能で公平な社会全体の「ウェルビーイング」です。

そして、「ウェルビーイング」の実現のためには、複雑で不確かな世界を歩んでいく力「エージェンシー」を発揮して学びの歩みを進めていくことが必要とされています。

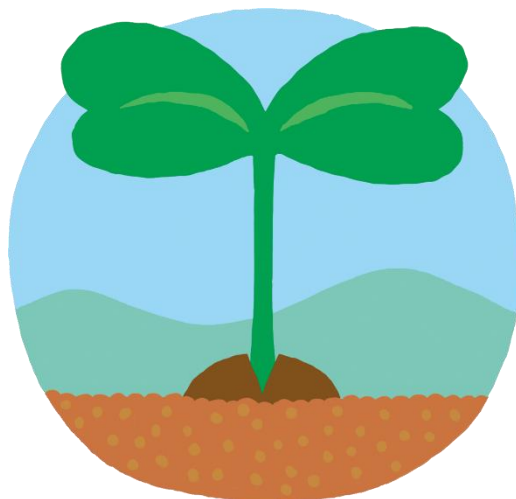
平成 29 (2017) 3 月に公示された学習指導要領の前文には、幼稚園・小学校・中学校に共通して、“これからの学校・幼稚園には、一人ひとりの子どもが、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を

乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる”（抜粋）と明記されています。

また、平成 30（2018）年度から全面実施されている、幼稚園教育要領、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、すべての就学前教育・保育施設における教育の共通性を確保し、質を保障することが明確に示されました。

## 就学前のこの時期は、一生の始まりの時期です。

植物の種に発芽する力があるように、子どもたち一人一人にも学び生きていく力があります。寝屋川市のすべての子どもたちが、寝屋川教育で掲げる「考える力を身につけたたくましく生き抜く子」に育っていくことを目指して、「寝屋川市就学前教育・保育プログラム」を作成します。



※「ウェルビーイング」(well-being)とは、心身の「良好な状態」や「健やかさ」「幸福度」とされており、OECDでは「個人と社会全体のウェルビーイング」が目標とされています。このプログラムにおきましては、就学前の時期に「毎日楽しく生きること、また、その状態」であることを表します。

※「エージェンシー」(agency)とは「主体性・当事者性」とされており、OECDでは「目標を設定し、ふりかえり、責任を持って(主体的に)行為することによって変化を起こす力」と定義されています。このプログラムにおきましては、「他者と関わりながら、自ら考え、主体性、自主性を持って行動できること、また、自分でできることや年齢に応じて自立している状態」であることを表します。

## 2 本市における状況

### (1)これまでの取組

本市においては、就学前教育、学校教育、生涯学習と、「誰が・いつでも・どこでも」学習できる生涯学習社会の実現を目指す中で、平成 17(2005)年度から全中学校区において、目指す子ども像を明確にし、義務教育9年間を見通した継続性・系統性・計画性のある「小中一貫教育」を推進し、特色ある中学校区づくりに取り組んできました。

令和2(2020)年3月に策定した教育大綱では、「"寝屋川"だから学べる」を基本理念として、「『考える力』の確立」と「特色ある『寝屋川教育』の確立」の2つの視点に立って、子どもたちが将来、自らが身に付けた力を活用し、感性や創造性を最大限に発揮するため、ディベート教育、道徳教育等を通じて育んだ「考える力」をベースとして「生き抜く力」を養うことを目標に掲げています。また、寝屋川ならではの教育環境の実現を目指すとともに、教育・保育関係機関、家庭、地域との連携のもと、「寝屋川教育」の一部であることを踏まえた就学前教育・保育の充実を明記しています。

また、子育て世代包括支援センター(SKIP)の設置による妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援体制の構築、子育てリフレッシュ館(RELATTO)における保護者へのリフレッシュの機会の提供、「待機児童 ZERO プラン R」による保育所待機児童の解消や With Books 事業(HOP ステージ)、バイバイおむつ事業、多子世帯応援事業の推進など、就学前の子どもと保護者への支援に積極的に取り組んでいるところです。

### (2)本市における子どもの状況

「寝屋川市立幼稚園・保育所の在り方に関する審議会」答申(令和3(2021)年6月)においては、「従来は家庭で身につけていた社会性が育まれにくくなっている」「地域の人間関係の希薄化で多様な大人との関わりが少なくなっている」「外遊びの場所や機会が減少している」「対人関係におけるコミュニケーションがとりにくい子どもが増えている」などの子どもの状況が指摘されています。

本市の就学前教育・保育施設の現場からも、「便利な道具に囲まれた生活の中、手先や体を使う動作が減っている影響で、姿勢保持や雑巾しぼりができない子どもが増えている」、「自分の気持ちを素直に出せない傾向が見られる」、「外遊びの機会が減って体力がついていない、けがをしやすい」、「保護者支援の必要性が高まっている」など、子どもを取り巻く環境の変化が、子どもたちの生活や活動に大きな影響を及ぼしている実態を指摘する声が挙げられています。

### (3)「寝屋川教育」につながる就学前教育・保育プログラム作成の経緯

本市では、国が示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を目指して、子どもの資質・能力を

育むとともに、「寝屋川教育」につながるよう、質の高い就学前教育・保育を提供し、義務教育との円滑な接続を推進するために、「子育て・教育総合支援本部」が中心となり、特色ある就学前教育・保育のプログラムを確立し、実践していくための調査・研究に取り組んできました。

国が掲げている、これからの時代に求められる、創造性を発揮して、「3つの資質・能力」(知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等)の基礎を身につけて主体的に学ぶことができるという人物像は、すなわち、「考える力」を身につけた、たくましく生き抜く子どもの育成に向かう「寝屋川教育」と同じ方向を示しています。

また、昨今、大変注目されていることは、そのためには、就学前の時期に、意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、創造性、コミュニケーション能力などの非認知能力の基礎を築くことが非常に重要であるということです。

子どもたち一人一人の個性を尊重するという共通認識のもと、0歳から15歳までの15年一貫教育・保育により、自分で考え自分で判断できる、自立した人間への成長を支え、すべての寝屋川の子どもたちが、在籍する施設等にかかわらず、多様な活動を楽しみ、達成感を味わいながら、小学校以降の「主体的・対話的で深い学び」につながる基礎を培うことを目指します。



※「3つの資質・能力」の基礎とは、「知識・技能の基礎」(豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かたり、できるようになったりする)、「思考力、判断力、表現力等の基礎」(気づいたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする)、「学びに向かう力、人間性等」(心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする)です。

### 3 寝屋川市の就学前教育・保育の基本的な考え方

我が国の子どもたちの幸福感や自己意識、社会への関心度を国際比較調査で見ると、多くの調査からは、自分を幸福だと思えず、自己肯定感が低く、社会の一員であるという当事者意識も低い日本の子どもの姿が浮かび上がってきます。

「OECD Education2030」の成果である「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)」では、「ウェルビーイング」が目標として示されています。そして、子どもたちは、誰もが生まれながらにして、自分の人生や他者との関わり周囲の環境に対してポジティブな影響を与えることができる能力と意志を持っているという前提に立って、複雑で不確かな世界を歩いていく力「エージェンシー」を発揮して学びの歩みを進めていく姿が示されています。そのうえで、教育を通じて、子どもたちには、よりよい未来の創造に向けた変革を起こす能力として、「新たな価値を創造する力(創造)」「対立やジレンマを克服する力(尊重)」「責任ある行動をとる力(自律)」が必要であるとされています。

地球規模の視点で解決が求められる課題に対峙していかなければならない時代に、一人一人が自立した個人として、また、社会に貢献できる大人として生きていけるよう、子どもの成長と学びを支援する必要があります。

#### 基本的な方向

今の子どもたちが大人になって生きる世界は、すでに大人である私たちの常識では計り知れない様々な課題に直面することが予想されています。大人が子どもたちに「答え」を教えることはできないのです。

そのため、子どもたちには、自ら考えて、見通しをもって、行動し、結果を振り返りつつ、次の見通しを得て、さらに次の行動を起こすということを繰り返す力が必要です。この力こそがまさにOECDで掲げられている、複雑で不確かな世界を歩いていく力「エージェンシー」であり、寝屋川市の就学前教育・保育ではこの「エージェンシー」に着目し、子どもたち一人一人が「エージェンシー」を発揮していくこと・発揮できる状態になることを目指していきます。

「エージェンシー」の発揮を可能にするためには二つの要素があるとされています。一つは、子どもたちに動機づけを与えたりするような一人一人に応じた環境であり、もう一つはしっかりとした基礎力をつけることであるとされています。そのためには、知識や技能といった認知能力と、心情・意欲・態度といった目に見えにくい力である非認知能力が必要であり、認知能力と非認知能力は相互に影響し合って伸びていきます。また、仲間や先生、保護者、地域の人々などと相互に影響を与え合うことで、この「エージェンシー」はより発揮されるようになります。(共同エージェンシー(Co-エージェンシー))

## (1)0歳からの「自ら育つ“チカラ”」の育成

子どもは、乳幼児から主体性をもって周囲の環境に関わっていくことで多くのことを学んでいきます。「寝屋川教育」で掲げる「考える力を身につけた たくましく生き抜く子」に育っていくための基礎となる力、とりわけ非認知能力は、就学前の時期の遊びを通じた経験から培われます。小さな一つひとつの事柄を自分で考えて自分で行動するという自己決定の積み重ね、また、仲間との関わりが、「エージェンシー」の発揮につながります。

ただし、子どもがエージェンシーを発揮し、さらに伸ばすためには、大人の支援を必要とし、教員・保育者は、その専門性によって支援していくことが必要です。

## (2)教員・保育者が自ら持つ力の発揮

子どもの「エージェンシー」の発揮を実現するためには、教員・保育者が自ら持つ力を発揮することが大切です。教員・保育者が子どもの興味・関心に対して、遊びが広がっていく見通しを立て、環境を用意するといったことを通じて、教員・保育者自身も遊びの広がりワクワクしながら見守るなどの子どもを主体とした支援を行い、子どもと同じ目線で遊びの展開を楽しむといったことです。そして、教員・保育者も子どもたちと同様に失敗を恐れず、試行錯誤して自らの学びを重ねていける環境であれば、おのずと教育・保育の質の向上が図られます。

遊びを通して学ぶことの本質を理解して、教員・保育者が自ら持つ力を発揮できるようになると、教員・保育者にとって仕事のやりがい、楽しさを感じることができ、「ウェルビーイング」にもつながっていくと考えられます。



## 4 目指す子どもの姿

就学前教育・保育は、「環境を通して行う」ことが基本であり、乳幼児が自ら積極的に、人やもの、自然現象など周囲の環境に関わり、体験を重ねることが大事です。

本プログラムを活用して、環境を構成し、一人一人の子どもの心と体に寄り添いながら、ありのままの子どもの姿を受け止め尊重し、深い子ども理解に基づいたすべての子どもの育ちを捉える就学前教育・保育を通じて、「ウェルビーイング」に向かう「考える力」や「3つの資質・能力」の基礎が育まれることを願って、次の通り「目指す子どもの姿」を設定します。

### 【就学前に、目指す子どもの姿】

#### ★自分のことが大好き（自己肯定感が高い）

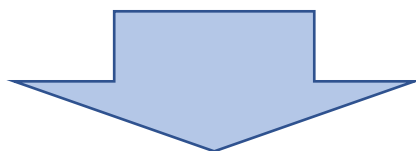
- 自分のよさを知り、可能性を信じてチャレンジできる
- 失敗してもあきらめず、やり直しができる

#### ★体験して、考える（見て触れて感じて考えて行動する）

- 遊びや生活のすべてを通して経験することに対する「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目をみはる感性）」の感受性をもつ
- 自ら興味をもって様々な活動に取り組む意欲をもつ

#### ★みんなを大切に（人と関わる）

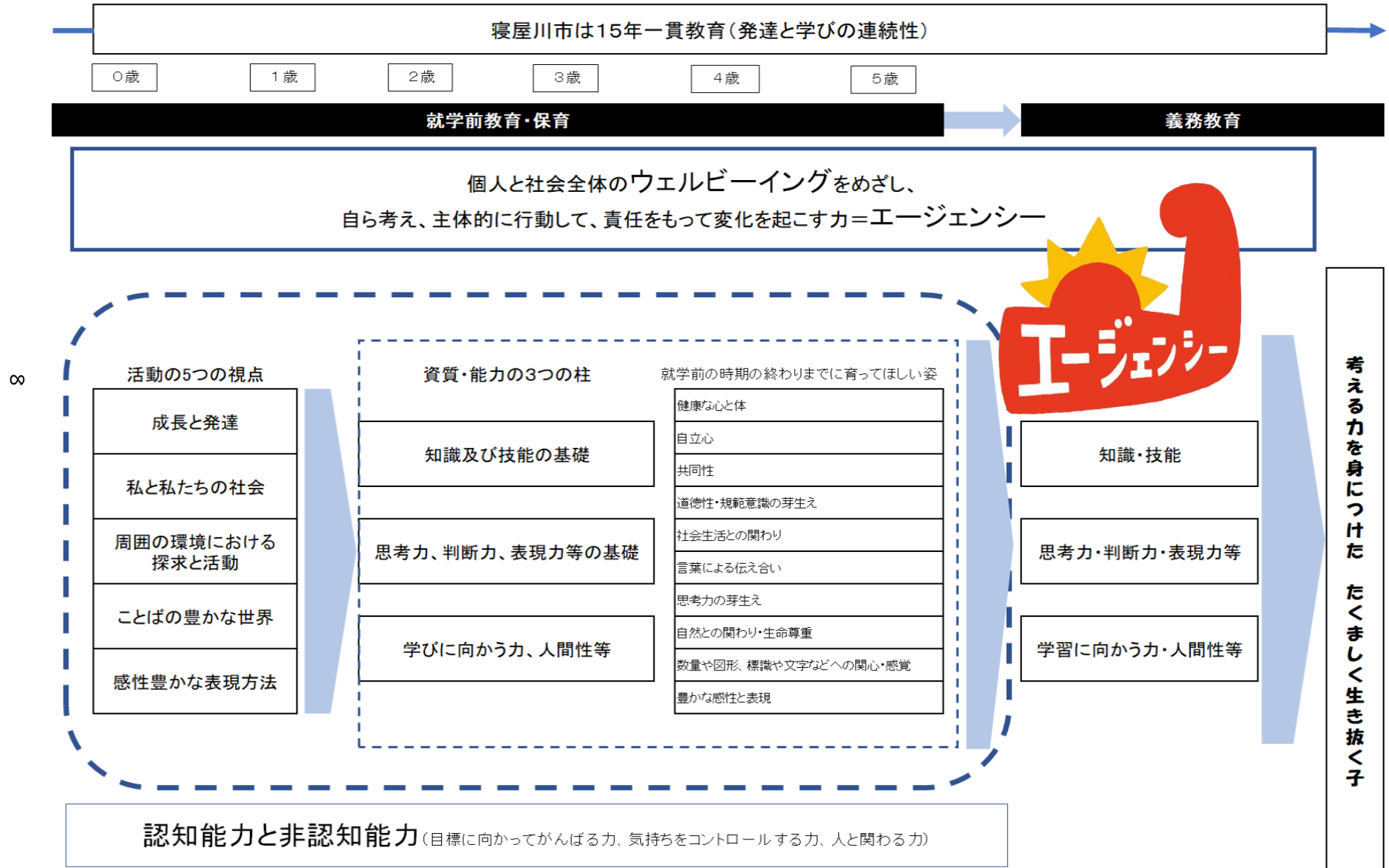
- 集団のなかで自分の考えを発言でき、相手の考えを尊重することができる
- 友だちの気持ちを想像したり、仲間とかかわる力をもつ



### 【寝屋川教育】

考える力を身につけた たくましく生き抜く子

## 5 就学前教育・保育プログラムと義務教育との確かな接続イメージ図



# 6 発達の特徴

(出典:「幼児一人一人が未来の創り手に—幼児教育 Q&A—」(一般社団法人保育教諭養成課程研究会)より)

## 人はどのように にして育つの？

0歳から5歳へ、そして学童期へ、 発達や学びはつながっていきます

### 人は周囲の環境に自ら働きかける力をもつ

- ◆人は生まれながらにして、自ら育つ力、周囲の環境に能動的に働きかけようとする力をもっています。
- ◆幼児の心身の諸側面は、それぞれが独立して発達するものではなく、遊びの中で相互に関連し合って発達していきます。
- ◆幼児期は自己を表現することが中心の生活から、他者と関わり合う生活を通して、自我の発達の基礎が築かれていきます。

**0歳**



愛情に包まれて  
すくすく育つ

★視覚、聴覚等の感覚が育ち、座る、這う等の運動機能が発達します。特定の大人との関わりを通じて、情緒的な絆が形成されます。

♥愛情深く応答的で穏やかな関わりを重ねます。

**1歳**



自分で歩き出し  
世界と出会う

★身体的な成長や感情表現の成長が著しい時期です。

手で感触を確かめ、道具も使うようになり楽しさが広がります。

♥安全に十分気を付け、子どもの動きや気持ちを支えます。

**2歳**



イヤイヤニコニコ  
いろいろな気持ち

★自我が最も発達します。言葉も増えてきて、おしゃべりが楽しくなり友達と同じ動きを楽しむようになります。

♥いろいろな体験を親子で楽しみ感じる経験を重ねていながら、子どものやりたい気持ちが育っていきます。

**3歳**



やりたいことが  
いっぱい

★言葉も滑らかになり一人で行えることが増えてきます。「これが好き」「もっとやりたい」と自分の気持ちを出しながら遊ぶようになります。

♥うれしい気持ちを受け止め楽しく遊ぶ時間を大切にします。

**4歳**



自他の違いに  
気付く

★言葉や運動などが成長する時期です。楽しい経験を重ねると同時に、自己主張し友達とぶつかるなど葛藤体験を通して友達の思いにも気付きます。

♥自分のやりたいことにじっくり取り組む姿を大切に認めていきます。

**5歳**



自己を調整し  
学びへと向かう

★友達と力を合わせて遊びや生活を作り上げる満足感や、自分の思いを発揮して遊びを創り上げる達成感を味わい、自信を付けていきます。

♥協働して取り組める機会を作り、力を発揮している姿を認めていきます。遊びの中で学びを深めている姿を受け止めていきます。

自ら学ぶ  
小学生  
中学生

青年

大人

### 家庭と園で連携し、協働して育てる

- ◆生活の場や対人関係の広がりに伴って、興味や関心が様々な対象に向けられる中で思考力の基礎が培われていきます。
- ◆幼児期の教育は、家庭と園で行われ、両者は連携し、協働して一人一人の育ちを促すことが大切です。

<表記の説明>  
★発達の特徴  
♥教師や保護者の関わり方のポイント

《安心・安定》 幼児が健やかに育つ基盤

《安心・安定 + 広がり》

《充実・発展》 様々なものや人と関わりを深め自分の世界を広げていく  
様々なものや人との関わりを通して好奇心・探究心・協同性等が育つ

## 7 大切にしたい子どもの姿～一人一人に寄り添って～

平成30(2018)年度に施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、幼稚園、保育所及び幼保連携型認定こども園において育みたい「3つの資質・能力」が掲げられ、一体的に育むように努めるものとするということが明記されています。そして、それらは「遊びを通しての総合的な指導」で育まれます。また、この「3つの資質・能力」の育ちを根幹として、具体的に実現されるのが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」であり、このことを今後の小学校と共有して接続を図っていきます。



出展：「新幼稚園教育要領のポイント」(文部科学省)

すでに、市内の就学前施設においては、公立・民間とも、発達の特徴(前述6.)を捉え、これら「3つの資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を大枠の目標として掲げ、各施設がそれぞれの特徴を明らかにしたカリキュラムを設定して日常の取り組みが展開されています。

本プログラムにおいては、それぞれの施設の特徴や取り組みを尊重するとともに、一人一人の子どもの発達過程や環境、入園所の時期などの状況を踏まえ、育ちに寄り添うという観点から、あえて「〇歳まで」の到達点を示すということではなく、子どもたちが今以上にたくさんの体験・経験を積み重ねることができることを目指します。

就学前のこの時期の学びは、生活環境すべてを通して行われ、遊びを中心とした体験により、頭や心、体に働きかけます。そして、異なる場面や異なるときに経験したことが、網の目のように知識としてつながっていくことは、小学校以降の段階的に積み上げる学習とは異なる特徴であり、小学校以降の学習の土台となります。また、「個」から「集団」への発展も、この時期の学びの特徴です。

これまでの取り組みを基本としながらも、「エージェンシー」をより意識して一人一人に寄り添い対話し、その子どもの「今」の状況を把握し、教員・保育者が読み取った姿や気持ちを踏まえてクラス全体の指導計画を見直すことなどを繰り返し、子どもたちの育ちにつなげていきます。

就学前教育・保育において培われた子どもの育ちは、小学校とそれ以降の教育の基盤となります。

## 8 ねやっ Co-エージェンシー・プログラム

就学前の時期は、日常における「人」「モノ」「場面」などとの出会いすべてが教材となり、学びにつながります。本プログラムにおいては、子どもたちが、「エージェンシー」の発揮につながるさまざまな体験・経験をこれまで以上にたくさんできるよう、市内の就学前施設における“エージェンシー型”の実践、そして、就学前教育・保育の環境の充実につながる取組を促進します。

### 対話を重視するのが“エージェンシー型”

「エージェンシー」を発揮させるためには、子どもたちが「対話する」ことがポイントとなります。

すでに、それぞれの施設では、子どもたちの生活を豊かにするさまざまな取組や実践が行われていますが、子どもたちがより多くの未知の世界との出会い、心と体を目いっぱい使って遊びきる経験を重ね、そこから一歩踏み込んで子どもたちの素朴な疑問をきっかけに自ら考える機会の創出につながるよう、子どもたちがそれぞれの年齢や発達過程に合わせて「人と対話する」こと、そして、教員・保育者が対話を通じて子どもたち一人一人の興味関心を知るとともに、子どもたちの「エージェンシー」が発揮されるよう対話や働きかけを行うこと、そういった時間をたくさん確保する工夫が大事です。

### “エージェンシー型”の実践

- ① 研修
- ② “エージェンシー型”のデザイン

### 就学前教育・保育の環境の充実

# “エージェンシー型”の実践

## ① 研修

ねらい・視点	■質の高い教育・保育を展開するため、特に“エージェンシー型”の実践を組み入れていくために、一人一人の教員・保育者の資質及び組織全体の専門性の向上を図る。
取組内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●研修（「エージェンシー」研修、ICT 利活用研修 など）（市主催、外部）への積極的な参加</li> <li>●管理職員の研修への参加</li> <li>●リモート研修の拡大による研修への全員参加</li> <li>●往還型研修の実施</li> <li>●先進事例の視察</li> <li>●各施設における実践内容の発信</li> <li>●ノンコンタクトタイム（保育から離れる時間）のための人材確保</li> </ul>

## ② “エージェンシー型”のデザイン

市内就学前施設による、“エージェンシー型”の取組を、提案型で蓄積するとともに市全体に広げていく。

### 【対話のデザイン】

子どもたちが「対話する」ことに直接つながる取組を進める。

ねらい・視点	<p>■ことばを知り、自分の思いを伝え、様々な問題やジレンマを対話によって解決する力の基礎を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが話す楽しさを経験する。</li> <li>・経験とことばを結びつける。</li> <li>・新しいことばを知る。</li> <li>・子どもが友だちの話を聴くことができる。</li> <li>・大人が子どもの話をよく聴く。</li> <li>・大人が言葉を通して応答的に関わる。</li> </ul>	
取組内容	0歳～2歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>●絵本の読み聞かせ</li> <li>●歌にあわせた手遊び</li> <li>●声やことばを使う遊び（電話ごっこ、いないいないばあ など）</li> </ul>
	3歳～5歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ことば遊び（しりとり、同じ音で始まることばを集め、仲間分け、早口言葉、数え歌、伝言ゲーム、反対ことば、同音異義語、擬音語・擬態語、逆立ちことば など）</li> <li>●お話づくり</li> </ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「カルタづくり」から「カルタあそび」へとつながる活動</li> <li>●古典落語の要素を取り入れた早口言葉などのことばあそび</li> <li>●モノとことば集め(働く車の名前、動物、植物 など)</li> <li>●対話することを通して「考える」ことを学ぶ「子ども哲学対話」*</li> <li>●サークル対話(輪になって話す)で、その日の出来事など話す時間を設ける</li> </ul>
--	--

\*「子ども哲学対話」参考サイト

P4C in schools KANSAI-JAPAN(主として学校教育現場で P4C (Philosophy for Children: 子どものための哲学、子どもの哲学、子ども哲学などと表記される)を導入し、実践している人たちのグループ)

<https://kansai.p4c-japan.com/>

「子どものための哲学対話 on the web」(一般社団法人地域デザインプラットフォーム)

<https://kotetsu.site/>

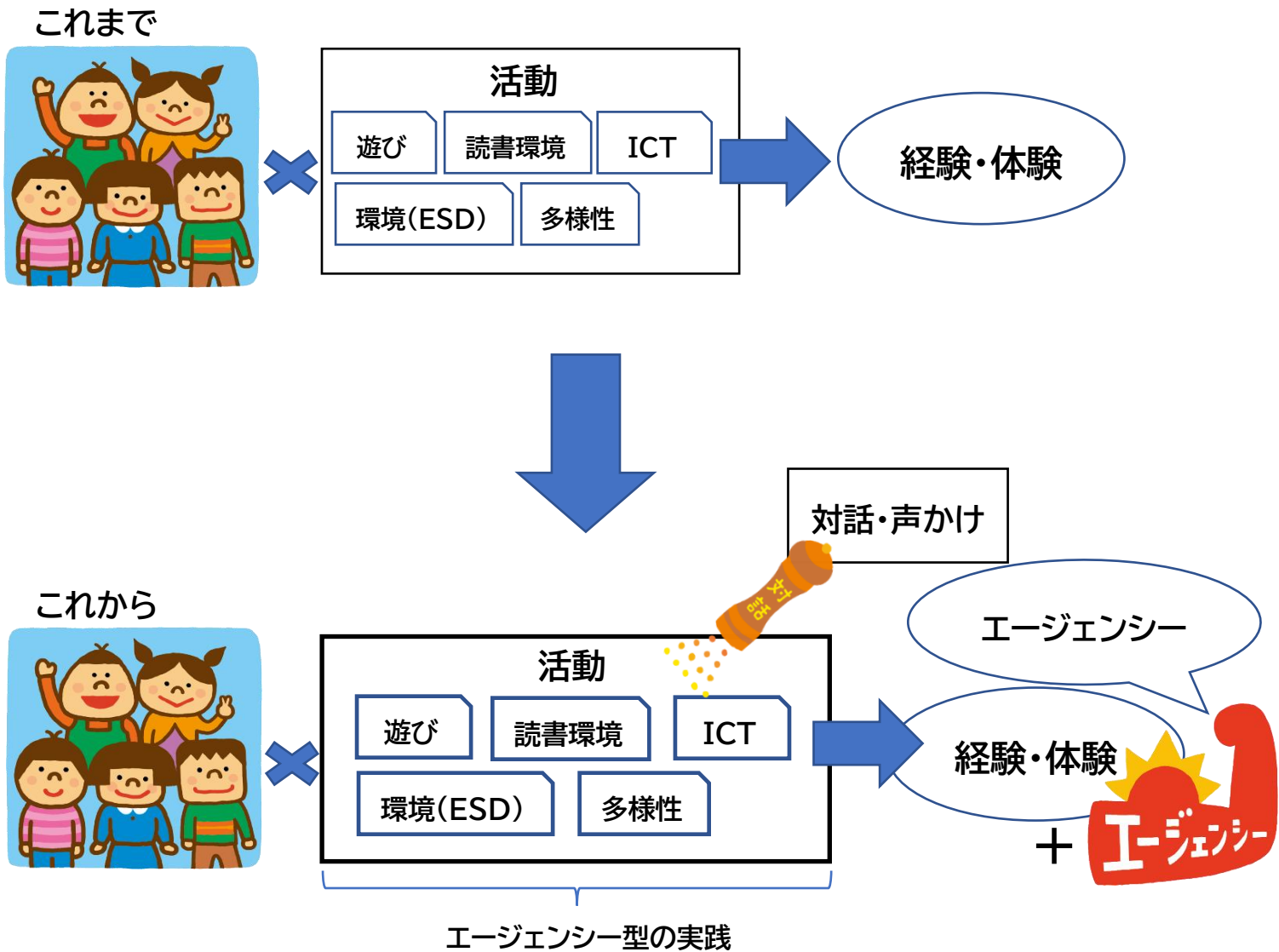
特定非営利活動法人 こども哲学・おとな哲学 アーダコーダ

<http://ardacoda.com>



## 【活動のデザイン】

日々の教育・保育の中で、教員・保育者がこれまでの活動に加えて、今以上に子どもたちが年齢に応じて「対話する」時間を設けること、声掛けを行うことで、新たな取組としていく。子どもたちへの日常的な声掛け、遊びや活動を通して言葉と行動をつなげていくような声掛け、子ども同士の対話、教員・保育者と子どもとの対話、また、時には子どもの気づきを待つ時間を作るなど、それぞれの場面に応じた「エージェンシー型」を意識する。





活動	ねらい・視点	ベースとなる活動の例
遊び	<p>■「人」「モノ」「場面」と出会い、様々な体験をすること、そこに対話・声掛けを加えることで、子どもがもつ自分から学ぶ力（自己教育力）を基に考える力を養う。</p> <p>・一人一人の育ちの違いに合わせた環境を用意する。</p> <p>・子どもの主体性を確保し、育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●美術体験（色の感覚、描く感覚）</li> <li>●楽器遊び、太鼓 など</li> <li>●伝統芸能体験</li> <li>●身近なもので創作音楽（アーティストによるワークショップ）</li> <li>●「数」に親しむ遊び（数的センス、量の感覚の体得）</li> <li>●劇遊び</li> <li>●身体表現（即興ダンス）（アーティストによるワークショップ）</li> <li>●創作遊び（ピタゴラスイッチ遊び など）</li> </ul>
読書環境	<p>■多様な絵本の中から子どもが読みたい本を選べて、本を通じた豊かな経験や対話を繰り返すことで、生涯にわたり本に接する習慣の基礎を養う。</p> <p>・共同注視、聴きあう、夢中になって一緒に楽しむ。</p> <p>・新たな気づきや共感を話し合う。</p> <p>・子どもが主体的に選ぶ環境を用意する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●絵本の読み聞かせ</li> <li>●大型絵本</li> <li>●紙芝居</li> <li>●ブックスタート</li> <li>●ブックラリー</li> <li>●朗読・暗唱</li> <li>●絵本と音楽の会</li> <li>●オンラインおはなし会</li> <li>●図書館ツアー</li> </ul>
ICT	<p>■ICT機器をツールとした様々な活動や対話を通じて、ICTリテラシーの基礎を養う。</p> <p>・新たな遊びを創造等、幼児の直接的・具体的な体験を更に豊かにするとともに、考える・探求するためのツールとしてICTを活用する。</p> <p>・個人の道具でなく、仲間と協働する、交流するための道具として活用する。</p> <p>・特別な配慮を要する子どもへの支援として活用する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●電子黒板を使った絵本の読み聞かせ</li> <li>●タブレットを活用した物語づくり</li> <li>●タブレットを活用した探求の取組</li> <li>●プログラミング体験</li> <li>●マイクロスコープを活用した植物、昆虫の観察でオリジナル図鑑をつくる</li> <li>●小学校の先生と連携したオンライン理科実験教室</li> <li>●オンラインものづくりワークショップ</li> </ul>
環境（ESD）	<p>■自然と触れ合う中で対話・声掛けを行い、自然への関心や親近感を育むとともに、周囲の環境への探求活動の基盤を形成する。</p> <p>・自然の多様性に触れ、多様な植物、生物の成長を体験できる環境を用意する。</p> <p>・一人一人の興味関心を引き出し、探求心を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●木育（木登り、遊び等、木と触れ合うことで木を身近に感じる活動）</li> <li>●環境カルタ、環境パズル遊び</li> <li>●生ごみの堆肥化と畑づくり</li> <li>●野菜の栽培</li> <li>●自然素材によるものづくり</li> <li>●野外活動体験（「森のようちえん」*）</li> <li>●移動動物園</li> </ul>

活動	ねらい・視点	ベースとなる活動の例
多様性	<p>■人や社会との<u>対話や関わりを通じて</u>、国籍、性別、障害の有無に関係なく、多種多様な価値観や考え方を知り受け入れる。</p> <p>■外国語に触れながら「聞くこと」「話すこと」について、身体を動かす活動や<u>対話を通して慣れ親しむ</u>ことで、外国語でのコミュニケーションを図る素地を養う。</p> <p>・遊びや対話を通じて楽しみながら英語を学ぶとともに、外国のことばや文化に興味を持てる環境を用意する。</p> <p>・外国人と触れあい、人と触れあう楽しさや日本語とは違うことばを知ること、コミュニケーション能力を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●英語などの音楽を聴く</li> <li>●英語版のアニメ番組などを観る</li> <li>●英語を使って笑顔であいさつしよう</li> <li>●英語を使って表現（気持ち、天気、色、形、数、体の部分、動物、家族、食べ物、自己紹介）</li> <li>●英語で遊ぶ（リトミック、ジェスチャーゲーム、うたあそび など）</li> <li>●就学前英語村（外国人英語講師と英語でコミュニケーション）</li> <li>●英語で読み聞かせ（本文読むだけでなく、子どもとやりとりしながら読む）</li> <li>●外国人英語講師の配置</li> <li>●多文化体験（言語、生活文化、食文化、衣装、祭りなど）</li> <li>●パラスポーツ体験</li> </ul>

\*「森のようちえん」参考サイト

特定非営利活動法人 森のようちえん全国ネットワーク連盟

<https://morinoyouchien.org/>

【就学前施設における遊びの様子】



【with books 事業(乳幼児への絵本贈呈事業)】



【キッズ・カフェ マッピング(子育てリフレッシュ館)】



【外国人講師、外国語と触れ合う様子】



## 就学前教育・保育の環境の充実

環境整備	<ul style="list-style-type: none"><li>●教材（教材全般、カルタ等、言葉に関するもの、フラッシュカード、動画コンテンツ、自然素材 など）</li><li>●ICT 教材（タブレット端末、デジタル絵本、幼児向けタブレット教材 など）</li><li>●図書（絵本、紙芝居 など）</li><li>●対話の場の設え（フリースペースの設置や保育室・廊下の改善 など）</li><li>●絵本の広場（施設内図書室）の整備</li><li>●集団遊び・個別遊びが可能となる設え</li><li>●WiFi 環境の整備</li><li>●スクリーン、プロジェクター、電子黒板等の整備</li><li>●連絡アプリの導入（保護者との連絡帳、園だより等の配信）</li></ul>
------	--

## 9 小学校との学びの接続

就学前教育・保育で培われた子どもの育ちは、小学校とそれ以降の教育の基盤となるものです。

小学校就学にあたっては、就学前から小学校教育への円滑な接続を目指し、子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、子ども同士の交流や教員・保育者、学校教職員同士の交流、情報共有や相互理解など、互いに連携しあうことが必要となります。

### ① 幼稚園・保育所園・認定こども園の連携・交流

子どもの発達段階を踏まえ、小学校就学を見据えた教育・保育を実践していくためには、幼稚園・保育所園・認定こども園の教員・保育者が、常日頃から交流する機会を持ち、互いの教育内容や指導内容について理解を深めることが大切です。

また、子ども同士の関わりは、子どもの豊かな心や健やかな体を育むことにつながり、小学校入学以降の仲間づくりの基本となることから、子ども同士がふれあう機会を充実させることが求められます。

### ② 小学校との連携・接続

子どもの発達と学びの連続性を確保するためには、子どもの発達を長期的な視点で捉え、就学前施設と小学校が教育内容や指導方法の違い、共通点について理解を深めることが大切です。

特に、5歳児については、就学前施設に在籍する子ども、在宅で過ごす子どもすべてが、小学校就学に向けて自信や期待を高められるよう、小学校との交流の機会を設けることが必要です。また、就学前の教育・保育の成果が小学校につながるよう、教員・保育者と学校教職員同士の相互交流・情報共有の充実、学校施設を利用した交流、就学前施設におけるアプローチカリキュラム・小学校におけるスタートカリキュラムの導入など、より一層、段差のない円滑な接続を目指していく必要があります。

## 寝屋川市の保育・幼児教育への期待を込めて

大阪総合保育大学 大学院教授・学長 大方美香

グローバル化、テクノロジーの発達と知識経済の発展等、社会の変化によって、社会で求められる能力が変化しています。時代の変化に対応して新しい能力概念が教育の議論の焦点となっているいま、寝屋川市の保育・幼児教育への新たな取り組みは斬新であり期待できる内容です。変化の激しい社会では、柔軟で創造的な適応力、課題を発見し多様な他者と協働して解決する力が求められます。

OECD の DESECO プロジェクトにより研究開発された指標としては、キー・コンピテンシーがあります。これは、国や文化等の背景に関わらず社会の参加へ導く特性を示しています。では、どのような幼児教育の実践がキー・コンピテンシーを育むために適切でしょうか。ニュージーランドでは、OECD のキー・コンピテンシーを参照し独自の教育アウトカムを設定し、乳幼児の統一カリキュラムである「ティファリキ」を作成しています。そこには、エンパワメント、全体的成長、家族とコミュニティ、関係性の4つの原則が示され、心身の健康、所属感、探求、貢献、コミュニケーションの5つの要素が示されています。「ティファリキ」には、価値を含む方法の原則と目指す人間像の方向性に沿うカリキュラムが示されていますが、文化や社会背景が異なる日本の幼児教育にそのままあてはめることは難しいといえます。

キー・コンピテンシーを育む幼児教育は、情緒的な安定と信頼を基盤に、子どもが直接事物と関わり合いをもちながら、現実的な状況のなかで様々な学びを得ていく教育です。挑戦の要素がある協同的・継続的な活動では、達成に至るまでに試行錯誤や葛藤を乗り越える力が求められます。また、対話や最後まで諦めない粘り強さが必要になってきます。乳幼児期の子どもは、何回も繰り返しながら、気づき、試し、時には葛藤し、また気づきながら様々なことを身につけていきます。相互作用的に知識や技術を活用する能力を育む幼児教育には、認知、感性の発達を促す環境が整えられていること、状況のなかで必要感に基づく学びが保障されていること、創造性を発揮できるオープンエンドな環境と活動があること、話し言葉を含む多様な表現の機会があることが大切です。次に、異質の集団における交流能力を育む幼児教育としては、多様性が尊重されていること、能力の多様性と自分の強みを知ることができること、協同的な活動が保障されていること、対立を乗り越えられるように援助が行われていることが必要といえるでしょう。最後に、自律的に活動する能力を育む幼児教育は、子ども自らが状況を判断し選択し行動するように促されていること、挑戦の要素があり失敗を体験できることや、活動に継続性が組み込まれ、粘り強さが発揮できることが重要です。その基盤は、情緒的な安定と、自己と他者への信頼を育む保育・幼児教育が必要です。

これからの保育・幼児教育は、新しい時代を生きる子どもを育む教育へのイノベーションが必要です。保育者は、これまでとは異なる新しい時代を生きる子どもたちのために、自らの体験や価値観とは異なる、新しい幼児教育を創造することが大切といえるでしょう。

最後になりましたが、本冊子は市長の保育・幼児教育への深いご理解と熱意が基盤となっております。実現に向けて多面的に学ばれ、議論を繰り返されました子育て・教育総合支援本部の皆さまの御尽力の賜物です。今後の具体的実践への取り組みは、全てのこどもの保育・幼児教育の質の向上に必ずや寄与することと信じております。益々の御活躍を祈念し私のメッセージとさせていただきます。

## 作成協力者（敬称略）

監修者 大方美香 大阪総合保育大学 大学院教授・学長

アドバイザー 中村 恵 畿央大学教育学部現代教育学科 教授

白井 俊 文部科学省国際統括官付国際戦略企画官



寝屋川市就学前教育・保育プログラム  
～ねやっCo エージェンシー・プログラム～  
令和5年3月発行  
寝屋川市子育て・教育総合支援本部